私の車いす生活 ～中部労災病院を退院して～　リハビリテーション科・社会生活講座より

How to get a good job!　～就職への道のり～

渡辺　広典
38歳・会社員・頚髄損傷

第２回リハ科社会生活講座　講演風景

これまでの経緯

平成５年１月、交通事故により頚椎を損傷してしまい、車いすの生活が始まりました。

受傷前は中京大学の体育学部に通っており、身体を動かすことが好きで、リハビリもそれほど辛いとは感じませんでした。そんな頃、再入院されてきた方に誘われて、ツインバスケットボール[1]を知り、入院中から練習へ参加し始めました。そこで、車に乗れること、就職や結婚している人がいることを知ると、その人達を目標に前向きに生活できるようになり、就職、結婚、子供などに恵まれ、今に至っております。しかし、すんなりと今の環境を手に入れられたわけではなく、就職に関しては苦労しました。

就職への道のり

約２年間の入院生活を経て平成６年11月に自宅へと戻ってきました。事故の時の補償金を使って建てた家はバリアフリー住宅で、車の乗り降りを含めた運転練習を５ヶ月程積み、ひとりでの運転が出来るようになりました。平成８年３月まではバスケットを週に３～４回し、その他は主に自宅での生活をしていました。しかし、将来を考え始めると、父親とふたりきりの生活に少しずつ不安も感じるようになりました。そんな時、同じバスケット仲間から「愛知障害者職業能力開発校」の存在を聞き、面接へと向かいました。そこで大きな壁にあたりました。

その壁というのは、基本的に全寮制という規則があり、身の回りのことが自立していなければならないということでした。一部通学者も認められてはいましたが、近隣者に限るものでした。私の自宅からは片道90km、高速道路を使っても１時間半も通学にかかってしまいます。当然面接時にはそれを理由に入校を断られてしまいました。

でもそこで諦めてしまっては、就職への道が絶たれてしまうと思い、面接官に食い下がりました。まず、通勤時間と距離の危険を言われ、事故などの責任は自らがすべて負うということを告げました。ところが、前例が無いということでなかなか認めてもらえません。しかしなおも食い下がり、「前例が無いのなら前例を作ります。」この一言が効いたのか特例ということで一応の了解を得られました。

そして１年間の通学が始まります。毎朝６時に起き、７時に家を出て、９時半から４時まで授業を受けて６時過ぎに帰宅をするという生活は正直大変でした。何度も辞めたくなりました。しかし、挫けそうになった自分の支えになったことは、自らが言った「前例を作る」という言葉でした。私が面接官に食い下がってまで通学の許可を貰ったことは、最後までやり通せばよい前例を作ることになります。しかし、途中で辞めてしまえば、悪い前例を作る結果になってしまうのです。それだけは避けなければいけないと思い、１年間必死に通いました。

そして今に至るのです。というのも、今働いている職場の面接時に一番評価されたことは、訓練校に通ったという実績でした。それがなければ、私以外のものを採用していたかもしれないと今でも思います。

訓練校イコール就職ではなく、諦めずに物事へと立ち向かうこと。そうすれば自ずと道は開かれると私は今でも信じています。障害を負うことはとても不幸なことです。しかし、考え方ひとつでいろいろな可能性、チャンスは誰にでも与えられるのです。悲観的に考え、後ろ向きにならなければ、いろいろな可能性が見えてきます。私もこれからもずっと前を向いていこうと思っています。

[1] 下肢のみではなく、上肢にも障害を持つ重度障害者でも参加できるように考案されたスポーツ。従来のバスケットゴールに加え、そこまでボールが届かない選手のために、低いゴールを設けている。

＊＊＊　リハビリテーション科・社会生活講座とは　＊＊＊

入院患者さん向けの生活支援応援会。社会復帰して活躍されている脊髄損傷者の方に、地域社会での生活について情報提供してもらうピアサポートの場。患者さん・ご家族の元気力アップと悩み解決に役立つ講座となるよう活動しています。